

---

# さくらゆき

文月まこと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さくらゆき

### 【Nコード】

N8971Y

### 【作者名】

文月まこと

### 【あらすじ】

若宮和彦は、いつもある事に恐れ、必死に誤魔化しながら生きていた。

そんな中で、和彦は少女との出逢いが訪れる…。

その出逢いが、和彦の人生を大きく変える事に…。

## さくらゆき 1話「逃亡開始」

自分の中は空っぽ。

世界が鮮やかな景色を見せている中で、自分の周りは何の色も見えない。

楽しい事も嬉しい事も何も無い、空っぽな自分。

そんな自分にもたった一つ、大切な場所がある。

悲しいとき。

辛いとき。

寂しいとき。

そんな時はいつも、あの場所へ行く。

その場所に行けば、暑い日は木陰になって、眠くなった時には心地よい風が吹く。

とてもお気に入りの場所。

そして、春にはいつも桜が咲いた。

その桜を見る度に、いつも泣きそうになる。

理由はよくわかっていない。

だけど、無性にその場所へと足を運んでいた。

何も無い自分が、大切にしている唯一の場所。

そんな自分を、いつも変わらずに慰めてくれるのも、桜の花びらだった。

右、左と確認して、誰もいない事を確認する。

若宮和彦は慣れた様子で、そっと自分の部屋から抜け出した。

自分にとっては、一日の中でどの時間が人の出入りが少ないかは、わかりきっている。

だから、部屋の脱出もかなりお手の物だ。

だが、それが得意になっても、悲しいだけだったが……。

「さ、飯の時間まで行くか」

和彦は無事に脱出できた嬉しさから、自然と足取りが軽くなった。

ふらふらと彷徨っていると、見知った顔が見えた。

いつもその女の子は、クマのぬいぐるみを抱えている。

そのぬいぐるみは、この女の子の相棒なのは和彦もよく知っている。

女の子はぬいぐるみを抱えたまま、窓の外を見つめていた。

「よ、理加ちゃん」

「お兄ちゃん……コホッ」

和彦の姿を見ると、理加は嬉しそうな顔を見せたが、すぐに咳き込んだ。

小さな子のそんな姿は、見ていて辛いものがある。

「あーあーあー、無理して喋らなくていい。咳酷いんだろ？」

「うん……。お薬飲んだんだけど……」

「じゃあ、ゆっくり寝ないとな……。眠れないのか？」

「だって、つまないんだもん。お兄ちゃんだって、寝てないじゃない」

「うわ、そう来たか」

小さくても女の子は、やっぱり鋭い。

見ていないようで見ていて、わかっていないようで、わかっている。

「な、理加ちゃん。理加ちゃんがお薬飲んだのは、何のため？」

「え……。飲めば、せきが止まるからって……」

「うん、そうだね……。咳が止まったら、身体も治るよ。そしたらさ、外に元気に遊びに行けるよ？」

「うん……」

「外で遊びたくない？」

「遊びたい……」

理加は再び、窓の外へと視線を移す。

そこには、理加と同世代の子達が元気よく走り回っていた。

理加だって本当はわかっている。

だが、頭で理解している事と心で思っている事は別なのだろう。

ただでさえ、遊びたい盛りなのに、こうした限られた生活は幼い子にはストレスになるのは、和彦にもよくわかっていた。

「なら、寝る？」

「寝る！！」

先程までとは違い、理加は勢いよく布団へと潜り込んだ。

その素直さに、和彦は思わず顔が綻ぶ。

理加はひょっこりと布団から顔を出して、和彦を見つめた。

「お兄ちゃんも寝なきゃだめだよ」

「ははっわかった。おやすみ、理加ちゃん」

「おやすみなさい……」

理加が目を閉じて少し経つと、規則正しい寝息が聞こえてくる。

薬が効いてきたのもあるが、やはり子供は寝つきがいい。

その寝つきの良さと素直さが、和彦には羨ましくなってくる。

昔は自分も理加のように、素直に信じる事が出来た筈なのに……。

いつからか信じる事を止めてしまった。

そうなってしまったのは、一体いつだったのかもう覚えていない。

「身体も……治る……か……」

宥めるためとはいえ、よく言ったものだと思つた。和彦は思う。

和彦は苦々しい思いを抱えながら、理加が眠る部屋を出ていた。

## さくらゆき 2話「逃亡先」

「じつちゃん、起きてる？」

「また抜け出したのか……」

和彦の顔を見るなり、渋い顔をしていたのは年配である田口だった。

そんな田口の態度も和彦にとっては、日常そのものだ。

「だって、つまんねえからさ……」

「また、看護婦さんに怒られるぞ……。この前も散々怒られとっただろうが……」

「何で知ってんだよ……」

「この建物の中で怒られるもんは、お前しかおらんだろ」

「……………」

田口の言葉はもっともであり、和彦としては面白くない。

だが、そんな和彦の態度も、田口にとっては慣れているものだ。

「そうやって抜け出してばかりだと、良くなるもんもならんぞ」

「いいんだよ……俺は」

「若いくせに怠けるんじゃないっ」

田口の叱るような口調に、和彦は口を尖らせた。

「じつちゃんは……嫌になったりしないのかよ？」

「ワシか……？ワシはもういい年齢だからな」

「だから……もういいのか？」

「ある一定の年齢を迎えると、そう思うもんだ……。だが、お前にはまだ早いんじゃない……。だからお前がわかるようになるのは……大分先だ」

「わかりたくねえよ……」

和彦は田口の言葉をまたも苦々しく受け止めていた。

どうも建物の中にいると、あれこれ考えすぎる。

無意識に和彦の足は外へと向かっていた。

人が行き交う玄関口へと着くと、そこでも見知った人物を見かけ、自然とその人物へと近づいていく。

「あれ、和彦何やってんだ？」

「よ、茂」

和彦がひらと手を上げていると、目の前の高井 茂は何やら慌てた様子だ。

「お前、寝てなくていいのかよっ」

「飽きた」

「飽きたじゃねーよ。いいから寝てろ」

「病人扱いすんな」

「病人だろうが、お前は」

「……………」

それは不意に出た言葉だった。

それが失言だと気づいたのは数秒後で、双方に気まずい空気が流れる。

だが、和彦は気にした様子を出さずに笑って見せた。

「いいよ、事実だから」

「悪い……………」

茂は悪気があって言ったわけではなく、心配から出た言葉だとわかっている。

それに傍から見たら、自分はそういう位置づけになる事も。

「今日はどうした？」

気まずさを払拭するために、和彦から茂へ話を促す。

すると、茂は持っていた鞆から数冊のノートを取り出した。

「あ、ああつ。これ」

「お前もマメだな。留年してる奴のためにノート取るなんてよ」

「いくら留年してても、最低限の勉強は必要だろうが。いい歳して常識知らずは笑えねえぞ」

「まあな」

茂の指摘は当たっているだけに、和彦には耳が痛い。

「少しずつでいいからやっておけ」

「ああ……だけど、お前来年受験だろ。俺に気を遣ってないで自分の勉強しろ」

「俺の事はいいんだよ。これも復習になるしな」

「そうかよ」

茂の真面目さには頭が下がるが、それでも和彦にとっては有り難い事だった。

「外まで送るわ」

「あんな……。俺はここで帰るから、お前は部屋で休んでろ」

茂がそう言っただけで、玄関口へと向かえば、人込みで姿が混ざり、すぐに見えなくなる。

和彦はそこから目を離せずに、ジッと動けずにいた。

### さくらゆき 3話「拠り所」

大和総合病院には、敷地の中心に桜の木が一本植えられている。

毎年綺麗に咲き続けており、今は丁度桜が咲くいい季節だ。

人々はその桜の花に魅了され、立ち寄る人も少なくはない。

和彦は、自然とその場所へと向かっていた。

その場所に早く着かない事がもどかしいが、少しでも早く間近で桜を見たかった。

そして早く、自分の心を落ち着かせたかった。

羨ましい、悔しい、辛い。

悲しい、寂しい、痛い。

自分の心を占めるのは、そのどれかが大半だった。

病気が治れば、家に帰れる理加が羨ましい。

何もかもを受け止めて、すでに覚悟している田口の事が寂しい。

普通の生活を送る茂を、見ていると悔しい。

そんな気持ちが、徐々に心を真っ黒に塗り潰していく。

少しでも心を真っ白にしたいくて、まっさらな気持ちになりたくて、桜を見たかった。

遠くから見える桜から、花びらが風に乗って和彦へと流れ込んできた。

それはまるで、別世界の案内のようでした。

その別世界に和彦は、少しずつ足を踏み入れる。

辿り着いた先には、素晴らしいものがあると信じていた。

そして、和彦がようやく木の傍に来ると、時が止まった。

「……………」

ひらひらと、ひらひらと、桜の花びらが舞い散る。

その花びらの一つ一つが、地面へと落ちていく。

和彦は自然と、その花びらの行方を見つめていた。

その花びらの一つ一つが長い黒髪や、小柄な身体。

そして、顔へと落ちていく。

桜の花びらがその場所へと落ちる事が、当たり前のように決められており、今この場所だけが時が止まっていると感じる。

そこには……。

満開の桜の木の下で、桜の花に包まれた少女が眠っていた。

黒い服を身に纏うその少女は、目をかたく閉じたまま、動かない。

その光景は、今までいた世界から切り離されたような感覚に捉われ、和彦は少女に釘付けになっていた。

まるで一つの絵のように、ぴったりと収まっている。

こんな光景は、今まで知らない。

さくらゆき 4話「戸惑い」

「……………」

和彦の内から、熱くなり始めたのがわかった。

一体、この感覚はなんだろうか……。

身体が熱く、心がざわめく。

そわそわとして落ち着かず、視線を逸らせない。

この感覚は一体……？

和彦はいつまでもその光景を見ていたかったが、そうもいかない。

今はまだ、春とはいえ寒い。

何故この少女がここで寝ているのかは最大の謎だが、放っておくわけにはいかない。

ひよつとしたら、倒れているのかもしれないし、どこか気分が悪いのかもしれない。

幸い目の前には、病院がある。

しかし、行き交う人が大勢いて、少女の事は目に入っている筈なのに、誰も声をかけないのも不思議だ。

やはり、他人には関心がないのだろうか？

「もしもーし、大丈夫ですか？」

和彦が声をかけても、少女の反応はまるでない。

その表情をよく見ると、苦しい表情は見られずに、逆に寝息が聞こえてくる。

どうやら、本当に眠っているらしい。

和彦はしょうがなく、腰を落として少女へと近づく。

そしてその肩に触れると、少しひんやりしている気がした。

これは長い時間眠っていて、身体が冷えているんじゃないか？

そんな風に思い、和彦は再度少女を起こしにかかった。

「起きてくださいー。風邪引きますよ」

和彦は少女の身体を揺すりながら、耳元で呼びかける。

「ん……………」

ようやくの事で少女が反応したので、和彦も安堵するが、すぐに言葉に詰まってしまった。

少女がゆっくりと目を開くと、その大きなつぶらな瞳は少女をより際立たせた。

こういう容姿の女の子が美少女なのだと、遅れて和彦は理解する。

「あなた、何？」

「は？」

少女から出た言葉に、和彦は戸惑いを隠せない。

少女は和彦が傍にいる事に驚かず、無表情でそう告げた。

何？

何って何だ？

俺は何だっけきてるのか？

そもそも、俺って何だ？

すでに相当舞い上がっているのか、和彦の中では軽く混乱状態だ。

和彦はとりあえず息を吐いて、思いつくまま口にする。

「若宮和彦、歳は十八。この病院に入院中。好きなもの、食べれる物は何でも食べる。嫌いなもの、特になし。両親と俺との三人家族。ペットは柴犬のママ太。」

「……そう。」

少女のそっけない返事に、和彦は少しムツとした。

「そうって何だよ、聞いておいて」

「別に聞いてない。あなたが勝手に答えただけ」

「……………」

確かにその通りだった。

少女は率直に和彦の事を聞いただけで、和彦にそこまでの関心があるわけではない。

それを勝手に舞い上がって、ベラベラと喋ったのは和彦だった。

そんなやり取りに、和彦の頭は冷静さを取り戻す。

和彦は少女の隣に座り込むと、単刀直入に切り出した。

「こんなところで寝そべって何してんの？」

「見てわからない？」

「いや、わかるけど…………さ」

その格好を見れば、寝ていた事は理解できる。

和彦が知りたいのはそうではなくて、何故わざわざ、人通りが激しいこの場所で眠っているのかがわからない。

そんな和彦の戸惑いが伝わったのか、少女は淡々と口にした。

「寝転がって桜を見たかった……。ただ、それだけ」

「桜を？」

「そう……。綺麗だから……」

「……………」

最早、何も言えなかった。

本当に意味などなく、寝転がって桜を見たかっただけのようだ。

その他に、何の意味もない。

豪快にも程があるだろう……。

さくらゆき 5話「不意打ち」

「桜、好きなの？」

「うん……………好き」

「っ……………」

今まで無表情だった少女の顔が、控えめに笑う。

その表情があまりにも綺麗で、和彦は一瞬見惚れた。

その事が少し悔しく、和彦はその事実気づかないフリをする。

「でも、こんな場所で寝てると風邪引くぜ」

「平気」

「平気じゃないだろ……………」

「私は平気なの」

やっとの事で少女は身体を起こすと、その身体のおちこちに桜の花びらがついていた。

少女は、その花びらを振り払っているが、多すぎてすぐには取れない。

その一生懸命な様子に、和彦は思わず吹き出していた。

「ほらっ、髪にもついてる」

和彦は少女の髪についた、いくつもの花びらを取ってやる。触れた髪は思っていたよりも柔らかく、さらさらしていた。

手が離れると、和彦は何故だか寂しいと感じていた。

「変な人」

「はあっ!?!どっちがだよ……」

いくら桜が綺麗だからって、こんな場所で寝転がっている方がよっぽど変だろう。

そんな少女に変だと言われ、和彦としては納得がいかない。

だが、それと同時に少女に興味があるのも事実だった。

閉鎖的な空間にいる自分にとって、目の前の少女はとても新鮮だ。

そのためか、和彦の口から自然と零れ落ちた。

「なあ、名前は?」

「……………」

「……………」

少女は何も応えない。

初対面で会った男に、いきなり名前を聞かれて警戒しているのだろうか？

自分でも唐突だとは思っ。

だが、それでも聞きたいと思っていた。

「……………みゆき」

渋々ながらもその名を教えて、みゆきは立ち上がった。

「帰る」

「そっか……………、またな。みゆき」

つい、そんな風に口にしたのは、和彦自身がまた会いたかったからかもしれない。

「……………」

みゆきはそんな和彦を一瞬だけ見つめ、そのまま何も言わずに歩き出していく。

和彦は、そんなみゆきの後ろ姿をいつまでも見つめていた。

さくらゆき 6話「色づくもの」

自分の部屋に戻ってきた和彦に待っていたのは、看護婦の怒りだった。

その険しい表情に、和彦は本気で逃げ出したくなった。

「和彦君つつ、また抜け出して」

「そ……そんなに怒らなくても……」

「和彦君！！」

「う……、すみません……」

和彦の言葉は、余計に怒らせる結果になってしまったようだ。

きつとまた、田口辺りに言われるだろうと頭の片隅で思う。

「まだ、外も寒い日が続くし、風邪を引く人だって沢山いるのよ。万が一体調に変化が起きたり、発作が起きたらどうするの……！」

「そこはほら……。大丈夫だったし……」

「そついつ問題じゃありませんっ……！」

「はい……」

「いい？わかつていると思うけど、発作が起きてすぐに対処しないと、危険な場合だってあります。何かあったからじゃ遅いのよ。そのためにもナースコールだってあるんですから……いいですか！」

「すみませんでした……」

看護婦の言葉に、和彦は素直に謝るしかなかった。

看護婦が部屋から出ると、訪れたのは静寂。

「危険な時……ね」

和彦はベッドの上に倒れこむと、ぼんやりと天井を見上げた。

仮に危険な状況に陥って最悪な状況になったとしても、一体誰が困るのか……。

和彦は自嘲的に笑いながら、どうしても考えてしまう事がある。

生きる事の意味が、わからない。

どうして生きているのか、わからない。

何が辛いのかも、わからない。

生きていて、何の意味があるのだろうか？

存在していて、何の意味があるのだろうか？

わからないまま生きているなら、いつそ消えた方が楽だと、思う時もある。

だけど、そうなれない自分にもどかしくて。

悲しくて、悔しくて。

ずっと、暗闇の中を歩いている感覚。

明るい光は、未だ見えないままだ。

このまま自分は消えていくのだろうか？

和彦がそんな負の感情に、捉われかけた時だった。

『あなた、何？』

「っ」

和彦の脳裏に今日出逢った少女、みゆきの姿が思い浮かぶ。

その事を思い出した途端、和彦を取り囲んでいた空気が変わった。

黒く塗り潰された心が、真っ白に変わっていく。

些細な出逢いだった筈が、和彦の心の中で確かに色づいて残っていた。

## さくらゆき 7話「恋愛指南」

年寄りの話は長い。

そんな事を和彦は今身を持って、実感していた。

きっかけは、田口と田口の妻の馴れ初め話から始まった。

最初は興味本位で聞いていた和彦と理加だったが、その話の長さから疲れ始めていた。

「最初は一目惚れだったんじゃない……。妻と出逢ったのは……。一目惚れだったワシはとにかく、来る日も来る日もアタックし続けた……」

「それでよく諦めなかったな……」

「それ程、妻に惚れこんでいたからじゃ……。ワシの気持ちにようやく妻が応えてくれて……。付き合うことになったんじゃない……。妻の父親に結婚を反対されて……。認めてもらうために……。相応の時間がかかった……」

妻の話をしているうちに、田口の話に火が点いてしまった。

結婚の話から、自分の子供の話……。

そして、妻の話へと熱が入って止まらなくなった。

「妻は本当にいい女だった……。ワシにはもったいないくらいで……」

…美人で器量が良くて……な」

「……………」

「……………」

「聞いてるのか！」

反応がない和彦と理加に田口が叱責をする。

そんな田口の反応に呆れつつ、和彦は状況を説明した。

「じつちゃん……。理加ちゃん、寝ちゃったんだよ……………」

「なぬ!！」

田口が冷静さを取り戻すと、疲れた理加が完全に寝入ってしまったている。

「まだ話は途中なのに……………」

「さすがに疲れちゃったんだと思う……………」

和彦も結構疲れているくらいだ。

幼い理加には、もっと負担がかかっているだろう。

目の前の田口は……そんな事には全く気づいていない。

「しかし……そんなにいいもん？」

未だ女の子と付き合った事のない和彦にとって、田口の話は理解しづらい部分もあった。

一人の人間に、そこまで気持ちを傾けた事はない。

だから、よくわからない。

人が人を想う気持ちが……。

「何だ……？お前、気になる女もないのか？」

「は……？」

気になる女？

そう言われて、真っ先に思い浮かんだのは……。

『うん………好き』

そう控えめに笑っていた姿が、頭の中に過ぎる。

一度だけ会った少女、みゆきだった。

まてまて、一回会っただけだぞ……？

それにすごい変な子だったし……。

和彦の表情から読み取り、田口は確信していた。

「ほら……いるんじゃないか」

「はあ！？何でそうなるんだよっ」

田口の指摘に、和彦はさすがに驚いた。

「一体、何でそうなるのか……」。

自分がそういう話をしているからといって、こちらまで巻き込まないで欲しい。

気になるといえば…確かに気になる。

みゆきの行動は不思議で、とても目を惹く。

だが、それが恋愛感情に結びつくかは別だ。

「いいと思ったら、すぐに声をかけたほうがいいんじゃないかな、わかっただけで、和彦」

「だから……何でそうなるんだよ……」

和彦は田口の言葉を、うなだれる様に聞くしかなかった。



さくらゆき 8話「思わぬ組み合わせ」

「あら、和彦君っ」

「こんにちは」

理加の部屋へと来ると理加の姿は無く、代わりに理加の母親がいた。

何度か部屋を訪れている和彦は、すっかり顔なじみになっている。

「いつも、理加を気にかけてくれてありがとうね」

「いえ……。今日理加ちゃんは……?」

「今ちよっと、診察なのよ」

「そうですか……」

理加がいないのならば、今日は一旦出直そうかと思っていた時だった。

「そうそう、和彦君。折角だから持ってって」

「何をですか?」

「じれよ」

理加の母が取り出してきたのは、一つの小さな箱。

どこかの店の名前が箱に記載しており、和彦は嫌な予感がした。

「今日はちょっと多めにケーキを買ってきたの」

「え……と、その」

和彦は内心冷や汗が出た。

理加の母は好意で言ってくれているため、どうやって断ればいいのか迷ってしまふ。

だが、結局は何も思いつかないまま話が進んでいく。

「折角だからね。和彦君にもぜひ食べて欲しいのよ。理加がいつもお世話になってるし」

「はあ……」

押しの強い理加の母に根負けし、和彦は何も言えずに箱を受け取っていた。

「どうするか、これ……」

和彦は歩きながら、持っていた箱を見つめる。

箱に入っているのはケーキがいくつかで、和彦は困り果てていた。

好意で貰った物を処分するには、気が引ける。

だからといって、誰にあげればいいのか……。

小児科病棟の子たちに渡すには、数が足りない。

それは他の部屋の住人にも言える事で、変に揉め事は起こしたくはない。

「最悪、看護婦さんにも言うか」

看護婦に事情を話せば、きっと何とかしてくれるだろう。

一応今は、また部屋を抜け出している時なので、それは最終手段にしておく。

和彦が習慣である桜の木へと訪れると、そこには先客がいた。

その先客を見て、和彦は自然と顔が緩む。

黒い服で長い黒髪の姿は、遠くからでもよくわかった。

「さすがに今日は寝てないんだな」

「……もう、桜咲いてないから……」

今はもう、桜の木は葉桜に変わっていた。

みゆきはそんな桜の木を無表情で見つめ、佇んでいる。

和彦はそんなみゆきを見つめながら、重要な事を思いついた。

「みゆき、これ食べないか？」

「何？」

和彦が差し出した箱に、みゆきは首を傾げる。

みゆきはそのまま受け取って、箱を開けた。

「！！！」

「みゆき？」

「これ……は？」

「ああ。知り合いの人がくれたんだけど、俺食べれないからさ。どう処分しようかと困ってたんだ」

みゆきは和彦の説明を聞いているのかいないのか、ずっと視線はケキに注がれていた。

その見つめる目はキラキラとさせている。

先程までの無表情とは大違いだった。

「た、食べていいの？」

「むしろこっちがお願いしてるくらいだ」

みゆきはその場に腰を落とすと、箱に入っていた苺のショートケーキとフォークを取り出す。

そして、すぐにそれを口に運んだ。

「っ」

「みゆき？」

「おいしい……」

「そ……そっか」

ケーキを食べているみゆきは、本当に美味しそうに食べている。

普通にしている時は殆ど無表情なのに、ケーキを食べている今は、嬉しそうに笑っていた。

桜やケーキ。

みゆきは、好きなものに対しては素直なのかもしれない。

そんなみゆきの姿は和彦にとって、不意打ちだった。

和彦はそんな動揺した自分を誤魔化しながら、みゆきの姿を見つめている。

みゆきはケーキに夢中で、和彦の存在など気にも留めていない。

「まだあるから、こっちも食べていいよ」

「食べないの？」

「俺は食べれないからな。そんな俺よりも、喜んで食べてくれる人の方がいいに決まってる」

「うん……わかった」

みゆきは二個目のケーキを頬張り、嬉しそうに食べ続けていた。

「ふう……」

さすがにケーキ二個はきつかったらしい。

だがそれでも、みゆきは満足そうに見える。

そんなみゆきの姿に、和彦も満たされていくのがわかった。

「ありがとう、助かった」

「貰ったのは私なのに、どうしてあなたがお礼を言うの？」

みゆきの言葉はもっともで、和彦は苦笑した。

「俺は甘い物は食べれないんだ。身体に負担がかかるから……」

「負担？」

「ああ、甘いものだけじゃない。塩分とかも制限されてるんだ、俺は」

過度に取りすぎれば、身体に負担がかかる。

負担をかければ、きっとすぐに気分が悪くなってしまっただろう。

そんな自分の身体が恨めしくてならない。

だが、これは自分の事情であり、みゆきに話したところで気分が暗くなるだけだ。

「だから、みゆきがケーキを食べてくれて本当に助かった」

「うん、本当においしかった」

みゆきは先程食べたケーキを思い出しているのだろう。

その表情はとても穏やかなものに見える。

そんなみゆきは、和彦へと視線を向けてきた。

「ありがとう……和彦」

「……っ」

桜にでもない、ケーキにでもない。

確かに自分に向けて、みゆきは笑う。

初めてみゆきは、自分の名を口にした。

それだけで、和彦の中に甘いものが広がっていた。

さくらゆき 9話「クマは恩人」

「理加ちゃん？どうしたの？」

「お兄ちゃん……」

和彦が理加の部屋へと訪れると、理加のすすり泣く声が聞こえる。

理加の顔を見ると、予想通り目いっぱい涙を溜めていた。

「何かあったの？」

「クマちゃん……取られちゃった」

「誰に？」

「あきらくん」

あのクマは理加にとっての大事な相棒だ。

そのクマが取られたとなれば、理加が泣くのも頷ける。

「で、あきらはどこにいるって？」

「あっち……」

理加が指を指した方向は部屋の出入り口で、そこには小さな頭がこっそりと覗いていた。

もっとも、和彦からは丸見えだったが……。

クマを取り上げたものの、あきは理加が気になって仕方がないらしい。

これは、俗に言う好きな子いじめか……。

どうしたものかと考え、和彦はあきらがいる出入り口へと近づいていく。

近づくと案の定、あきらから睨まれた。

「ったく、返してやれよ」

「ふんっ、嫌だねっ」

「そんなことしてると、理加ちゃんに嫌われるぞ」

「……………」

和彦のその言葉にあきは少しだけ怯んだが、簡単には引けないらしい。

だが、このままにしておくわけにもいかない。

「ほらっ、返してやれ」

「嫌だって言ってるだろっ」

そう言ってしまうえば、あきは一目散に駆け出していく。

さすが子供、こういう時の行動は素早い。

「おい、走るな」

「へへーんだ……わわっ」

追いかけてくる和彦に気を取られて、前方不注意のあきらはクマを  
持ったまま転んでいた。

「お……おい、大丈夫か？」

「いって……」

和彦が確認すると、あきらは無傷で済んでいた。

どうやらクマのお腹が、あきらを守ってくれていたらしい。

「全く……自分を乱暴にしたお前をクマが守ってくれたぞ」

「クマが……？」

「ああ。お前が怪我をしてないのは、クマが庇ってくれたからだ」

「……………」

あきらはクマをジッと見つめている。

その視線は熱心で、キラキラとさせている。

どつやらあきららの中では、クマが偉大に見えているようだ。

「だから……そんなお前の恩人をちゃんと元の持ち主に返してやれ」  
「!！」

和彦が示した方向には、廊下での騒ぎが気になっていたのか、理加が部屋の出入り口から、ひよっこりと顔を出す。

あきららは理加へと近づいてくと、恩人であるクマを理加へと差し出した。

理加はクマを受け取ると、手放さないようにギュッと握り締める。

「じめんな……」

「うん……。あきらくんも大丈夫？」

「……そいつが守ってくれたから……」

「クマちゃん……、とっても優しいの」

「うん……」

和彦はそんな二人のやり取りを見届け、そっと部屋から離れていた。

「……っ、はぁ……、はぁ……っ」

和彦は胸を押さえながら、静かにその時を待つ。

こうしてじっとしていれば、そのうちにこの苦しみが無くなるのを長年の付き合いでわかっていた。

そしてその通り、徐々に呼吸は落ち着いてくる。

和彦は深い息を吐くと、ベッドの中で突っ伏していた。

「いつそ消えてくれ……」

生きるか死ぬかの瀬戸際にいる自分。

長い苦しみが続くなら、消えてなくなってしまう方がいいのに……。

それでもそうならない自分は、浅ましくも生に縋りつく。

そんな自分が、滑稽に思えてならなかった。

「！」

耳を澄ますと、部屋の外から足音が聞こえてくる。

足音が近づいてくると、和彦は何事もなかったように姿勢を正す。

弱った姿を誰にも見られたくないのは、自分の意地だった。

「よっ」

和彦が返事をする、現れたのは茂だった。

夏期講習の帰りなのか、夏休み中だというのに制服姿だった。

「勉強大変だな……。夏休みだつてのに……」

「夏休みだからだろ、そもそも受験生には夏休みなんてないようなもんだ」

やれやれと疲れきっている茂の姿さえ、和彦からは羨ましく思える。

本来なら自分も茂と同じ立場の筈なのに、今の自分はベッドの中だ。

「もう、進路決めたのか？」

「一応は。経済学部とかには思ってる」

その答えは真面目な茂らしい。

茂ならばきつと合格するに違いないと、和彦は思えた。

「和彦は？」

「俺は……まだ未定だ」

「そうか……」

身体の事もあるが、それ以前にやりたい事が見つからない。

この身体で何をやればいいのか、思いつかない。

二人の空気が重くなった事に、茂は慌てて話を切り出した。

「そ……そういえばさ。この前、可愛い子と一緒にいたな」

「……」

みゆきの事か。

まさか、茂に見られているとは思わなかった。

「あの子も入院してんのか？」

「さあな……」

何で茂がそんな質問をしてきたのかはわからなかったが、みゆきの事を教えてやる気にはならなかった。

「何だ、よく知らないのか？」

「ああ……」

よく知らない。

確かにその通りだ。

知っているのは、名前と好きな物。

小柄な身体にさらさらと靡く長い髪。

着ている服は、何故かいつも黒だとか。

普段は何も関心がないように見えて、好きな物には優しく笑うとか。

そして声が、透き通るような声だとか。

それ以外の素性は何も知らない。

何で病院に来ているのかとか、どこに住んでいるのかとか何も知らない。

だけど、それでも心に残る。

みゆきの存在が、和彦の中で確実に棲みついていた。

もっと、笑った顔を見たい。

もっと、逢いたい。

そんな気持ちが湧き上がってくる事に、和彦は理解し始めていた。

誰にも知られずに、自分のだけの心に秘めておきたいとすら、思ってしまう。

「そうか……。また、逢えるといいな」

「ああ……」

黙ってしまった和彦に、茂は差し障りのない無難な言葉をくれた。

さくらゆき 11話「白と黒」

和彦は手に持っている物に違和感を感じる。

こんな物は今まで自分の意思で手にした事は無く、酷く不自然だ。

それでも和彦は敢えて、それを手にしたまま桜の木へと向かう。

そして、今日も先に来ていたみゆきにそれを差し出した。

「何？」

「お菓子」

和彦がみゆきに手渡したビニール袋には、いくつかのお菓子が入っていた。

病院内の売店で、悩みながら購入したものだ。

自分から買った事のない物は、すごく居心地が悪い。

「うわ……あ」

みゆきはそれを受け取ると、その瞳をキラキラと輝かせている。

その様子は、この前のあきらを思い出させる。

今のみゆきの視線はお菓子へと注がれていた。

我ながら姑息だとは思うが、それでも表情が変わるみゆきの顔が見たかった。

「食べるか？」

「うんっ」

みゆきは袋の中からチョコを取り出すと、すぐに口に入れた。

「やっぱり、おいしい……」

みゆきは嬉しそうに、お菓子を食べ続ける。

その幸せそうに食べる顔を、和彦は見たかった。

ビニール袋に入っていたお菓子が無くなると、和彦は気になっていた事を口にした。

「何で、いつも黒い服を着てるんだ？」

「……………」

初めて逢った時も、以前も今もみゆきは黒い服を着ていた。

顔立ちが整っているみゆきにはとても黒が似合い、みゆきの事をも引き立たせている。

だが、同時に寂しさも感じた。

「黒は……終わりの色だから」

「終わり？」

「黒は全てを飲み込む色。黒に飲み込まれれば、何も無くなるから……。私は何も無いから……だから、黒い服を着るの」

その感覚には、和彦には覚えがあった。

和彦自身も、闇に飲み込まれて消えてしまいたいと思った事が幾度もある。

みゆきも同じ様に思っているのだろうか？

「でも、それじゃ寂しくないのか？」

それは単に口から出た言葉だった。

言葉にした和彦も、言われたみゆきも意味をよく理解していない。

「寂しい？」

「だってそうだろ。終わりばかりだと辛い。例え黒に飲み込まれたとしても、そこで終わりなら寂しいだろ。例え消えて無くなったとしても、またそこから何か始まる事は出来ないのか？」

それはみゆきに言っているというよりも、自分に言い聞かせている

ように感じた。

暗い中へと身が落ちそうになっても、完全に飲み込まれずに必死でもがいている自分がある。

和彦はわずかにある光へと手を伸ばして、必死でその光にしがみつく。

その光の先に、希望があると無意識に信じていたのかもしれない。

「仮に飲み込まれて何も無くなったとしても、それは悲しい事ではなくて……。何も無かったところから、何かまた新しいものが生まれるきっかけかもしれない」

自分が口にした事は、綺麗事かもしれない。

だけど、そう思わなくては生きていけなかった。

何かに繋がる事を信じていたかったのかもしれない。

「だから……みゆきだって、黒だけじゃなくてピンクとか白とか……そういう服だって似合うと思う」

「私が……?」

「ああ。黒が終わりだって言うなら、白は始まる色なんだから……?自分で決め付けるなよ、勿体ないから……」

「……………和彦って……やっぱ変」

「あいな……」

みゆきの顔がほんのりと紅く染まっている。

素っ気ない口調は、みゆきなりの照れ隠しなんだと和彦は気がついた。

そしてそれが、可愛いと思ってしまう自分にも。

和彦は動き出した気持ちを、誤魔化す事なんて出来なくなっていた。

気がつけば和彦は、お菓子を持ちながら外へと足を運ぶ日が続いていた。

「今日は苺大福と……お団子」

「苺……大福？」

「知らないのか？この中に餡と苺が入ってるんだよ」

「え……！？」

その説明を聞くと、みゆきはその組み合わせに驚いたようだ。

だが、両方とも好きなものだから喜んで食べ続けている。

「じつじつのあるんだ……」

「ああ……。大福とか団子とかの和菓子って、結構な種類があるんだよな。苺の代わりに、栗だったり芋が入ってる大福とかもあるみたいだし……」

「うわ……」

それはテレビでの知識だったが、とても色鮮やかだったのが印象に残っている。

みゆきは和彦の話に、とても興味が引かれているらしい。

お菓子に関しては表情が変わるみゆきに、和彦は面白くて仕方が無い。

幸せそうに食べるみゆきと他愛の無い話をする。

それが和彦にとって、とても幸福な時間だった。

さくらゆき 12話「秋の別れ」

季節が秋の終わり頃、一つの知らせが和彦に舞い込んできた。

「退院？」

「うん……」

「そっか……。良かったね、理加ちゃん……」

「うんっ！」

長く入院していた理加の退院が決まった。

その事が嬉しいと思う反面、やはり寂しい。

長期に入院している人間は本当に限られており、早々に退院したり、状態が悪化したりと様々だ。

入れ替わりが激しい病院で、見知った人間がいなくなってしまうのは、和彦にとって寂しさが募った。

だが、幼い理加にとっては待ちに待った退院なのだ。

これは一緒に喜んであげなくては……。

「そっか、無理しないようにな」

「うんっ」

和彦が理加の頭を撫でてやると、理加は本当に嬉しそうに笑っている。

それは抱えている相棒のクマも、心なしか喜んでいるようにも見えた。

「理加、先生が呼んでるわ」

「うん、ママ」

母親が声をかけると、理加は診察室へと向かっていく。

「退院決定、おめでとうございます」

「ありがとうございます。まだ心配なところもあるけど、もう大丈夫だろうって先生から太鼓判を頂いたから……」

「理加ちゃん……ずっと頑張っていましたから……」

「本当にね……。見てるこっちが辛かったけど……、それがようやく報われて良かったと思うわ……」

理加の母は娘の退院が嬉しいのか、いつもよりもテンションが高く饒舌だ。

だから、不意にそんな話が出てきたのだろう。

「和彦君は……いつ頃に退院になりそうなの？」

「あ……と、まだ先です」

「そうなの？早く退院できるといいわね」

「はい……。ありがとうございます」

そう答える和彦は、どうやって笑ったか覚えていなかった。

「何やってるの？」

「さあな」

和彦が桜の木に寄りかかって座っていると、自分の目の前に影が出た。

「どうやら今日は、みゆきよりも自分の方が早く着いたらしい。」

折角みゆきと逢えたのに、今日の和彦の気持ちは沈んだままだ。

そんな和彦の様子が伝わったのか、みゆきは何も言わずに和彦の隣に腰掛ける。

みゆきは何も言わないし、聞かない。

和彦はそんな沈黙も辛くて、思わず口に出していた。

「なあ……。死んだらどうなるんだと思う？」

「どつって……？」

「消えてなくなつて、新しく生まれ変われるのか……とかさ」

馬鹿な話を聞いてると和彦は思う。

だけど、何故かみゆきに聞いてみたくなつた。

「死んだら何も無い。消えるだけ」

あつさりと言つてのけるのは、やはりみゆきだ。

「身も蓋も無いな……」

「だってそつでしょ？ひよつとしたら、いつかは生まれ変わるかもしれないけど……。今の私たちにはそんな事は覚えていない」

「確かにな……」

「でも……。きつと、どこかでは繋がつてるんだとは思つ……。何か新しいものが生まれるきつかけになるんだつて、前に和彦が言ったよ」

「ああ……」

みゆきと以前に話した言葉だ。

和彦の言った言葉をみゆきはきちんと覚えていて、和彦へと向けてくる。

みゆきへと伝えた事でも、本当は自分へと問いかけていた事だと、きつと見抜かれていた。

ずっと向き合わずに生きてきたのは、逃げてきたのは……自分自身だから……。

「……………」

「……………」

何も言わない二人に、秋の涼しい風が吹く。

そんな風を感じながら、口を開いたのは和彦だった。

「俺……心臓が駄目なんだ」

さくらゆき 13話「去来」

「……………」

みゆきは何も言わなかった。

和彦はそんなみゆきに対して、話を続けた。

「幼い頃から、心臓が弱くて……。よく発作を起こしては運ばれて……入院ばかりしてた」

思い描くのは、幼い頃。

周りの友人たちが走れば、自分もそれに倣って一緒に走った。

だが、身体は続かず、呼吸は乱れて倒れしまった。

甘い物も沢山食べたかった。

我慢していたけど、こっそり食べた時もあった。

だが、食べた後に気持ち悪くて吐き気がずっと続いた。

結局はそれも、親にバレてしまっただけで散々怒られた。

どうして自分だけがこんな風になるのだろうか？

オレはみんなとどこが違うんだろう？

幼い和彦には理解出来なくて、辛くて仕方が無かった。

「俺は辛くて……親を責めたんだよ……」

幼い和彦にとって、ストレスをぶつける事が出来るのは、両親しかない。

和彦は辛くて、悲しくて、両親を責めた時があった。

『どうしてこんな風に……オレを産んだんだよ!!!』

子供ながらの素直な言葉。

だが、その素直さは時に残酷だ。

そんな和彦を見て、両親は辛そうに泣いていた。

『ごめんね……。そんな身体で産んでしまって……。何も出来なくてごめんね……』

『和彦……ごめんな……』

そんな両親の姿を見て、和彦を襲ったのは後悔だ。

こんな風に泣いてしまう両親は、和彦は初めて見て……ショックを受けた。

自分の言葉で、両親を傷つけてしまった……と。

和彦はそんな両親を見るのが辛くて、自分の気持ちを押し殺して笑った。

『俺は……大丈夫だから……』

笑おう。

辛くても、笑おう。

そう、決めた。

泣き崩れて、辛そうな両親はもう見たくない。

そのためだったら、ずっと笑おうと……、和彦は決めた。

その後は、両親の前では泣かなくなった。

辛い気持ちは奥底へと沈めて、明るく振る舞う。

どんだけ心が泣いていたとしても、それは絶対に表には出さない。

辛い気持ちが溜まっていたとしても、それを無視して明るく振舞った。

休みがちだった学校では、中学までは何とか卒業出来た。

だが、高校ではそうは行かなかった。

高校では入退院を繰り返すと、出席日数が足りなくなった。

一度留年してしまうと、同級生は年上で、ただでさえ休みが多い自分には誰も寄り付かない。

学校では孤独になっていたが、そんな事は両親には話せなかった。

話せばきっと、また辛い思いをさせてしまうから……。

行ける時は学校に行つて、久しぶりの授業を受けていた。

そんな時、自分の元に来るのは、最初の同級生の茂だった。

学年が変わつた茂は、和彦のクラスメート達に頼んでノートを取らせてもらい、それをわかりやすく解説したのを和彦へと持つてくる。

繰り返し、何度も何度も。

茂の助けもあつて、クラスメート達も自然と和彦を助けてくれるようになった。

人間関係も円滑に進み、和彦はようやく学園生活を楽しむ事が出来る、そう感じたのに……。

そんな矢先、一年の終わり頃にまた倒れた。

そして、医師から言われたのは……。

『通常の生活に戻るのには難しいだろう。戻つてもまた、倒れるだけだ。しばらくは入院をして、養生した方がいい。ただ……退院はいつ出来るかわからない』

病状の悪化、だった。

今までは数週間から数ヶ月で退院出来ていたのに、それが出来ない。両親は、和彦の入院費を払うために必死で仕事をしなくてはならず、殆ど見舞いには来れない。

来るのは、茂だけだった。

茂は相変わらず、馬鹿みたいにノートを取り続けていた。

同じ入院仲間も、気がつけばいなくなる。

退院するか、転院するか……死んでいくか……。

気がつけば、様々な出逢いと別れを繰り返してきた。

そんな生活を送っていれば、嫌でも死を身近に感じる。

眠ったら、本当に次に目を覚ませるのか……？

そんな事を思いながら、夜を過ごす。

朝に目を覚ましては、生きている現実に嬉しくて泣いた時もあった。

「俺は……生きてていいのか……生きる意味が……わからないんだ」

それは、答えの出ない問題だった。

同じ問いばかりが駆け巡り、結局は答えが出ない。

そしてその問いは、どんどん和彦を追い詰めていた。

必死でもがいても、誰もその答えに正解をくれない。

苦しむ日々がずっと続いていった。

さくらゆき 14話「本当の気持ち」

「和彦は……どうしたいの？」

「え……？」

みゆきの言葉に、和彦が顔を上げる。

「和彦は……生きたいの？死にたいの？」

「俺は……」

「和彦が感じるのは……どちらなの？」

みゆきの問いは、シンプルだった。

だが、その問いこそが、和彦が答えなければならぬものだった。

「俺が……感じるのは……」

こんな事を改めて感じて、答えを出すのはおかしいかもしれない。

それでも、口にしても良いのだろうか？

望んでも……良いのだろうか……？

「俺は……生きたい……んだ。本当は生きて……いたい。まだ……死にたく……ないんだよっ！……！」

その言葉を口にするのと、和彦は自分が泣いていた事に初めて気がついた。

その涙さえも、自分の今の本当の気持ちだ。

この気持ちは自分だけのもの……。

それは誰にも……侵させないものだ。

今初めて、明るい光が見えた気がした。

みゆきは、そんな和彦を包み込むように抱きしめていた。

今まで自分は、死ぬ事ばかりに捉われていた。

自分は今、生きているのに、終わりばかりを考えていた。

生きている今を、大切にしなくてはならないのに……、自分はすでに諦めていた。

諦めて、不幸に酔いしれて、勝手に他人を妬んだ。

そんな無駄な時間を過ごしていた事に、和彦は改めて思い知らされた。

「馬鹿みたい……だな」

「ん？何が？」

「いや……何でもない……っていうか、何でここにいるんだお前は……」

「気分転換……だ」

「そうかよ……」

年が明ければ受験だと言うのに、茂は懲りずに和彦の部屋へと訪れていた。

口では呆れながらも、和彦は素直に感謝していた。

だから、つい聞いてみたくなった。

「何で……お前。いつも助けてくれるんだ？」

「何だよ、いきなり……」

改めて口にして聞いた事は、今まで無かった。

だが、どうしても聞いてみたかったのは、今までの気持ちが変わったからかもしれない。

「俺に関わってるのは、お前にとって負担でしかないだろ？それなのに……どうして助けてくれるんだよ……？」

「それは……」

真剣に聞いてくる和彦に、茂は正直な気持ちを口にしていた。

「お前が……頑張っているからだよ」

「は？」

「お前は覚えてないかもしれないけど……、俺、一度お前に聞いた事があつて……」

それは互いが高校一年の夏休み前だった。

クラス委員だった茂は、退院したばかりの和彦の補習に付き合つ事になった。

授業が遅れていた和彦は、多くの問題用紙を解かなければならず、教師もそんなには時間を割いてはやれない。

そのために、選ばれたのが成績優秀者でもある茂だった。

教師の代わりに、和彦に教えるのが茂の役目。

茂としては、折角の試験休みが潰れて面白くなかった。

そんな不満から、茂は和彦に聞いていた。

「なあ……学校に来るの、辛くないのか？」

「……」

今思えば、何て失礼な質問なのだろう。

あの時の和彦は、学校に来るのが月に数回だった時もあり、クラスメイトとも殆ど接触が無い。

そんな状況の中、延々と問題を解かなければならないのだ。

茂は、自分なら辛くて嫌で、学校には行きたくないと思う。

だが、和彦が口にしたのは意外な答えだった。

「辛くないわけじゃないけど……、学校に来れない方が辛い。俺は学校に来るのが好きだし、この時間を大切にしたいんだ」

一番辛い筈の和彦は、笑顔でそう答えてくれた。

その答えを聞いて、茂は自分が恥ずかしくて仕方がない。

クラスメイトも自分も、和彦の事を不幸な人間だと勝手に決め付けていた。

自分達は授業を受けられるのが普通で、とても当たり前前の事だった。

だが、和彦は違う。

和彦は授業を受けたくても、受ける事が容易ではない。

そんな自分の事をわかっているからこそ、学校に来れる時間を大切にしていた。

そんな和彦に対して、一体自分は何をやっている？

和彦を勝手に哀れんで、自分の時間が潰されたと憤って。

そんな事を感じる前に、もっと他にやる事があるだろう。

もっと、和彦のためにする事があるだろう。

茂はそんな思いから、学校を休む和彦のためにノートを取り始めていた。

それが和彦のために出来る、唯一の事だから……。

「お前が頑張っているのを見ると、俺も負けてられないって思うんだ。だから、辛い時はお前の顔を見たくなるんだよ」

和彦が笑って頑張っている姿に、自分も勇気を貰える。

そんな和彦に何かを返したかった。

「だから……ありがとう……」

「何言っただ……。礼を言うのは……俺の方なのに……」

和彦は何で先に言うんだと、言っただけでやりたかった。

だが、和彦は上手く言葉にする事が出来ない。

代わりに零れたのは、一滴の涙だった。



さくらゆき 15話「疑問のタイヤキ」

和彦は、今日のお菓子を何にするか選んでいると、目に留まったのはある自動販売機。

その自動販売機は、飲み物ではなく、食べ物が買えるという物だった。

「今はこんなのがあるのかよ……」

焼きおにぎりやたこ焼きが表示されている中、和彦の目に入ってきたのはある食べ物。

『タイヤキ』だった。

みゆきが喜んで食べる光景を思い描き、和彦は迷わずそのボタンを押していた。

和彦が到着すると予想通り、みゆきは和彦が持っている物に目が釘付けになっていた。

「それは？」

「タイヤキ」

和彦がみゆきに手渡すと、みゆきは幸せそうに頬張っていた。

その顔を見るだけで、和彦も自然と幸せになれる。

和彦は恒例となったこの時間に、とても愛しさを感じていた。

それは、目の前にいるみゆきに対しても……。

一匹のタイヤキは、あっという間にみゆきのお腹へと消えていった。

よほど美味しかったのか、みゆきはとても満足そうにしている。

「ふう……。お腹いっぱい……」

「あーあ。唇に餡がついてんぞ……」

「え……。どっ？」

和彦が指摘するとみゆきは見当違いの場所を、手で擦る。

だが未だに、餡は唇に残っていた。

「違う……。ここだ」

和彦の手が、自然とみゆきの口元へと手が伸びる。

そしてそのまま指で拭き取ると、和彦は無意識に自分の口へと運んでいた。

「……………」

「……………」

無意識の行動だったが、その行動を見つめていたみゆきと視線がち合う。

そして自分が今何をしたのかを、和彦はやっと気がついた。

「甘い……な。これ……」

「ん……」

口に広がる久しぶりの甘さ。

だがそれよりも気になったのは、みゆきの唇の柔らかさだった。

その感触を思い出すと、和彦の顔が徐々に赤みが増す。

そして、みゆきも何も言わずに無言のままだ。

みゆきもまた、自分と同じ様に顔が紅くなっている。

「……………」

「……………」

二人はしばらく顔が紅いまま、無言の時間を過ごしていた。

今日もまた顔を見に来たと、茂が病院へと寄ってきてくれた。

いつものノートを受け取る中、茂は思い出したように話を切り出す。

「そういえば……和彦」

「ん？」

「お前、あんまり外にいるなよ。たまに一人で見かけると焦る」

「はあ？いつの話だよ」

また、みゆきといるのを見られていたのかと、和彦は思う。

みゆきの存在はまだ、自分の中に秘めておきたい。

「一昨日。何か知らないけど、桜の木の下で一人で見ただぞ。何か、声をかけづらい雰囲気できてさ……」

「え……、一昨日のいつだよ？」

「ん？早く学校が終わった頃だから……一時過ぎか？」

「いや……一人じゃないと思うが……」

「何言ってるんだ。お前をあの場所で何度も見てるが、いつもお前一人だけでいたぞ？その度に何かに話しかけているっていうか……考え込んでるっていうか……」

「……………」

茂の言葉に、和彦は衝撃が走った。

確かにその時間には、桜の木の下にいた。

ただし、みゆきと一緒にいた筈だ。

その時間は、みゆきにタイヤキを持っていった日だった。

「お前だつて前に見た事があると思う。髪の高い女の子と一緒にいた時だよ」

「はあ？俺が前に見たのは、小さい女の子だよ。確かぬいぐるみを持ってた」

「見た事が……ないのか？」

「ああ、そんな女の子しか俺は見えてないけど？」

茂が指しているのは、理加の事だろう。

茂は変に嘘をつく人間ではないので、みゆきの事は本当に知らないらしい。

「和彦……。変な女にでも引つかかっているのか？」

「そんなんじゃない。そんなんじゃない……ないんだ」

和彦は茂の話を受け流しながら、疑問だけが頭に残っていた。



さくらゆき 16話「本当の意味での幸せ」

「なあ、じつちゃん。幽霊っていると思うか？」

「なんじゃい、藪から棒に……」

「いや……何か急にそう思って……」

田口にそんな質問をしたのは、茂との話が原因だった。

みゆきの存在は確かに謎のままだ。

一瞬幽霊の類かとも思ったが、そんな考えはすぐに捨てた。

和彦はみゆきに確かに触れられる。

みゆきは確かに、存在している。

それだけでいい筈だ。

「幽霊……な。いたらいいと思うし……いないならいいで……いいと思うがの……」

「何だよ、それ……」

歯切れの悪い田口の言葉に、和彦は腑に落ちない。

そんな和彦の様子が伝わったのか、田口はゆっくりと語り始めた。

「もし……幽霊でもいいから……逢いたい人がいるが……。百合や……大分前に亡くなった両親にも……」

百合というのは、亡くなった田口の妻だと前に聞いた事があった。

「だが……逢いたいののはこっちの都合じゃ……。向こうは逢いたくないかもしれない」

「どうしてだよ……？ 家族なら……逢いたいと思うものじゃないのか？」

「ワシは散々迷惑をかけて……生きてきた。両親にも……百合にも……。もっと、幸せにしてやりたかったと……。今でも思う時がある……」

和彦は何も言わずに、ジッと田口の話に耳を傾ける。

「そんなワシの事なんぞ忘れて……、皆天国では、すでに幸せになつてるかもしれん。そんな幸せの中を邪魔するのは……流石に気が引ける」

「……」

「だから……時々思い出した時に……逢いに来てくれればいいと思  
うんじゃ……」

「それでいいのか？」

逆にそれでは寂しくならないのかと、和彦は思う。

だが、田口は首を横に振っていた。

「ああ。時々逢って……幸せな思い出の話をする……。ずっと一緒にいれば、辛くなるかもしれない……。だが時々なら……。きつと幸せな話が出る……。これはワシが死んだ後も言える事だがの……」

「死んだ後……？」

「ああ……。死んだ者の事でいつまでも悲しんでいるよりも、さっさと忘れて……。生きている者には……。幸せになつて欲しい……。そしてワシの事は……。時々思い出してくれればいいんじゃない……。それがワシにとって……。本当の意味での幸せになる……」

「……………」

「ちょっと難しかったか？」

「いや……。確かにそう思うよ……」

「……………そうか」

俯きがちになつた和彦の頭を、田口は優しく撫でていた。

今まではきつとわからなかった……。

そんな風に、思う事など出来なかった……。

だが、自分が死んだ後……、両親には笑っていて欲しい。

茂や理加……田口。

そして……みゆきも……。

自分の死が重荷にならずに……、幸せに過ごしてくれればいい。

そう願わずにはいらなかった……。

さくらゆき 17話「冬の別れ」

今年の冬は寒い。

連日と続く寒さが、人々を苦しめていた。

そして……、その日は寒さが一段と厳しくなり始めた日だった。

「え……、じつちゃんが……!?!」

看護婦から聞いたのは、とても信じられない内容だった。

「だって……ほんの数日前まで……あんなに元気だったのに……」

「それが……ここところ……ずっと寒かったでしょ……。その寒さが原因で風邪を引いてしまったね……。それをこじらせて……。肺炎になってしまったの……。もうお年だったから……。体力も持たなかったのよ……」

「じつちゃんが……死んだ?」

ほんの数日前、一緒にいたばかりだ。

自分の話を聞いてもらって、田口の話に花を咲かせて……。

ずっと笑い合っていたのに……。

それなのに……、もう逢えない。

逢って話す事も、怒られる事も。

笑い合う事も……もう出来ない。

まだまだ話したい事も沢山あったのに……。

それがもう……出来ないなんて……。

「……っ」

和彦は何も言えずに、その場にしゃがみこんでいた。

「……あっ……う……っ」

「和彦君……」

「ああああ……っ」

和彦はただ、その場で泣く事しか出来ずにいた。

看護婦が何かを慰めの言葉をくれたが、和彦には届かなかった。

泣いたところで、田口が帰ってくるわけではない。

それでも、溢れる涙は止まらず……、床を涙で濡らし続けていた。

じっちゃん……。

じっちゃんは時々思い出してくれればいいって言ってたけど……。

今の俺にはまだ……無理そうだ……。

そして、和彦は理解する。

死ぬ時は、案外あつけないものなのだと。

桜が散るように、命も散りゆく。

わかってはいた……。

ずっと一緒にはいられない。

今までも散々、別れを繰り返してきた。

そうやって、自然と慣らされてきた。

だが、理加に……田口。

二人は和彦の前から、簡単にいなくなってしまった。

一緒に過ごしてきた時間は、ほんの一瞬だ。

あっという間に通り過ぎて、簡単に散っていった。

自分ももうすぐ……散っていくのだろうか……？

そんな予感が和彦の中で感じていた。

さくらゆき 18話「未来への約束」

寒さが続く中……、それでも和彦は、桜の木へと向かつのを止めな  
かった。

警鐘が鳴っているのは、もちろんわかっていた。

だが、それでも……。

和彦はみゆきに逢いたかった。

「よっ……」

「和彦……」

みゆきの顔を見れば、それだけで今の和彦には十分だった。

自分の身体よりも、重要な事になっていた。

「みゆき……。俺……。決めたよ」

「ん？」

「俺……。これからの事をもっとよく考えてみたい……。病氣と闘っ  
て、勝って……。自分の生きる意味を見つけないんだ」

ようやく口に出ることが出来た。

未来への希望。

自分にとって、これは大きな前進だ。

「そっか……」

「俺さ……ずっと思ってた事があるんだ」

「何を？」

「桜の花が咲いている姿を見ると、何故か泣きたくなった……」

何故だかはよくわからなかった。

だが、それでもこみ上げてくるものが和彦の中にあつた。

「今ならわかるんだ。俺がずっと……絶望の場所にいたとしても……、限らない美しいものがあるって……さ。子供なりに、その桜の美しさにどうしようもなく……惹かれてた」

どれだけ暗闇の中にいたとしても……、自分を取り囲む世界は何て美しいんだろうか……。

桜だけではない。

沢山の植物、空、海、星や月に太陽。

そして……人々。

自分は今まで、ずっと目を向けなかった。

眩しすぎて、目を背けていた。

だが、桜の存在が一つの道筋としてずっと心の中にあった。

それが、和彦にとって唯一の救いだった。

「仮に俺がいなくなったとしても、世界は廻る。でも……それは悲しい事じゃない。それでいいんだよ……。そんな美しき世界に生れ落ちて……俺は幸せ者なんだよ……」

「うん……」

和彦はみゆきの手を取ると、その手を強く握り締めていた。

「俺……、春にまた桜が見たい……。今度はお前と一緒に……」

いつも逢う時は、偶然だった。

逢える事を夢見て……、ひたすらこの場所に訪れていた。

だが、今違う。

みゆきと確実に逢う事を和彦は誓いたかった。

偶然ではなく、必然にしたかった。

「うん……私も一緒に……桜を見たい」

「約束……な」

「約束……」

和彦は小指をみゆきへと突き出すと、みゆきはゆっくりと小指を差し出す。

そして、互いの小指を絡ませていた。

「うーそつーたらーはーりせーんぼーんのーます、ゆーびぎー  
った」

勢いよく手を動かすと、二人は自然と笑みが零れていた。

「これでしつかりと約束したからな」

「……うんっ」

未来に向けての約束を確かに交わす。

それは何て、幸せな事なのだろう……。

満ちたりた空気が二人を包んでいた。

「……くっ……!!」

「和彦!!」

和彦は、急に胸が苦しくなり、手で胸を押さえる。

だが身体は辛く、次第に力は抜けていく。

「……………んあつ！！！」

和彦は堪え切れずに、地面の上へと倒れこむ。

いつもの発作だという事はわかってはいたが、身体が思うように動かない。

「和彦っつ！！！」

遠くで、みゆきの声が聞こえたのがわかったが、応える事が出来なかった。

さくらゆき 19話「迫る音」

前から不思議には思っていた。

いつもあの場所へと行けば、必ずみゆきに逢えた。

独特な雰囲気を持っていて、笑うととても可愛くて。

一緒にいると、とても落ち着いた。

もっと、みゆきの事が知りたいといつからか思うようになった。

だけど素性を聞いたら、きつともう逢えなくなる気がした。

何者でもいい。

何でもよかった。

ただ、逢いたかったんだ……。

和彦がぼんやりと目を覚ますと、明かりが薄っすらと点いていた。

身体が重く、目もはつきりとは開かない。

何やら話し声が聞こえるが、向こうはこちらには気がついていない

ようだ。

その声の主は、どうやら自分の両親と担当医だと、徐々にわかってきた。

だが、話は切迫している。

そして和彦も、声が出なかった。

「先生……和彦は……大丈夫なんですかつつ!!」

「和彦君の心臓はもう大分弱りきっている……。早急に彼に合う心臓が必要になってます……。ですが……ドナー提供者が未だに見つからない状況です……」

「……それじゃあ、和彦はどうなるんですかつつ!!」

「息子さんは……もう……あと三ヶ月持つかどうかの……命です」

「そんな……っ。他に方法はないんですか……っ」

「残念ですが……。あとはもう……彼の体力を信じるしか……」

母親のすすり泣く声を聞きながら、和彦は再び目を閉じていた。

年が明けると同時に、和彦の身体は悪化していく一方だった。

和彦は殆ど部屋から出る事が出来なくなり、ベッドの上で過ごすこと

いた。

時折、発作が起きれば意識が遠のく事も多くなる。

両親は交代で、和彦に付きっきりになっていた。

「よ、和彦。来たぞ」

「おう……」

一呼吸をおいて、和彦はやっとの事で返事をする。

和彦は喋ることすら、時々苦しんでいた

茂も毎日の様に、和彦の所へと足を運んでいた。

「高井君、いらっしやい」

「こんにちは」

茂が母親に頭を下げ、持ってきた花を渡す。

母親はその花を花瓶に活けに、部屋から出ていた。

「今日はセンター試験だったんだ。取りあえずは精一杯やってきた」

「そうか……」

「だから……お前も頑張れ」

「ああ……。俺は絶対に……。負けたくない」

「そう……。だな」

発作が無い日は、茂や両親とも和やかに過ごす。

だが、和彦に見えないところで、みんなが泣いているのを知っていた。

みんなが和彦を想って……。泣いてくれている。

そんなみんなに、何も出来ない自分が辛くて……。申し訳なかった。

こんなにも支えられてきたのに……。

そんな風に過ごす中で、和彦は死が迫ってくるのを感じていた。

さくらゆき 20話「散りゆく時」

そして、季節は二月を過ぎた頃。

母親は自分の傍で、休息を取っている。

その横で和彦は、暗闇の中で感じていた。

ああ、ついにきたのか……この時が。

折角、もう少し真面目に生きようと思っていたのにな……。

どうしていつも……上手くないんだろう？

誰かを……悲しませたくて……生きているわけじゃないのに……。

どうしてもっと、生きていられないんだろう？

どうして……早く気づけなかったんだろう？

もっとやりたい事が沢山あった。

もっと色々な人と出逢いたかった……。

色々な人と話がしたかった……。

もう一度、桜が見たい。

みゆきとの約束を果たしたい……。

一目でいいから……。

……みゆきに逢いたい……。

ただ、その一心だった。

母親に気づかれずに、こっそりと部屋を抜け出す。

幸い今日の夜は、月が出ていて明るかった。

和彦は持てる最後の力を振り絞って、あの場所へと向かう。

和彦が大切にしてきた、唯一の場所。

桜の木へと。

「はっ……、何で……いるんだよ」

「来たかったから……」

「こんな……時間にか……？」

真冬の深夜に外を出る者など、滅多にいないだろう。

唯一の例外が自分で、そしてみゆきだった。

「よかった……。逢えた……」

和彦はみゆきを自分の元へと引き寄せると、弱々しい力でその身体を抱きとめた。

どうして今、ここにみゆきがいるのかとか、自分の身体とかはどうでもよかった。

自分の腕の中に、みゆきがいる。

ただそれだけで、和彦は満ち足りていた。

次第に身体に力が入らなくなり、立っているのが辛い。

「悪い……。座っても……。いいか？」

「ん……」

みゆきは和彦を自分の膝へと寝かせ、その身体を優しく抱きしめる。

「みゆき……」

「うん……」

「俺……さ、幸せ……だった……」

「うん……」

「俺……今まで……気づかなかった。俺の周りには……優しい人……」

…たちが……いたのに……」

和彦は、途切れ途切れになりながらも必死で言葉を紡ぐ。

もう、話をする事さえ辛くなっていた。

だけど、今話をしなければ、もう永遠に出来なくなってしまう。

その思いが、和彦を動かしていた。

「何でさ……気づかなかった……だろう……な。もっと……大切に  
……したかった……のに……」

身体力が徐々に失われていく。

真冬の夜の寒さは、弱った和彦の身体を蝕んでいた。

「俺……。死ぬ事は……怖く……ないんだ」

「……」

「それよりも……誰にも気づかれず……、一人で……死んでいく事  
の方が……ずっと怖かった」

いつも思っていた。

誰もいない時に発作が起きたら……。

その発作が、致命傷だったら……。

死んでいく時に、誰も傍にいないまま……果てる事になったら……

悲しみを抱えたまま、死んでいくのはあまりにも辛すぎた。

……。ただ……。

「……ただ……みゆきに逢えて……、傍にいてくれるだけで……、俺は……旅立つ……事が出来る」

視界がぼやけてきた。

みゆきの顔もよく見えない。

「……ただ……ただ、一つ願うなら……最期に……もう一度……桜が……桜が……見たかった……。お前と一緒に……約束……したのに……な」

いつも願っていた。

入院する度に、桜が咲き終える時期までは絶対に生きると、強く願っていた。

それだけが、今までの和彦が持っていた、生きる希望だった。

けれど、ようやく他に生きる希望が出来たのに……。

生きる事を前向きに考える事が、出来たのに……。

だが、どうやら今年は、桜を見る希望は叶いそうもない……。

みゆきと約束を交わしたのに……。

一緒に桜を見る……約束を……。

「もし……本当に……生まれ変われるなら……、今度は……生きる意味を……見つけたい……。俺だけの……生きる意味を……」

「和彦っっ!!」

「……っ」

みゆきの声に、和彦の返答はない。

和彦はもう目も開ける事も出来ず、言葉も発する事が出来なかった。

さくらゆき 21話「消える魂」

かすかな呼吸だけが聞こえ、わずかな命の灯火が点いているだけだ。きつと、あと少しでその灯火も消えゆくだろう。

みゆきはそんな和彦の身体を抱きしめながら、ボロボロと涙が溢れ出す。

「ごめん……。ごめん……。和彦……」

今はもう届いているかどうか分からない中、みゆきは必死で和彦へと謝罪を口にしていた。

本当は出逢わなければ、よかった。

出逢っちゃいけなかった。

和彦の寿命を縮めたのは、他ならぬみゆき自身だった。

あの日、和彦と出逢った日。

和彦がみゆきの存在に気づいた時から、歯車が狂いだしていた。

出逢った事が……全ての原因だった。

自分は、和彦の命を狩りにきた……『死神』なのだから……。

本来、人間にはみゆきの姿は見えない。

だが、和彦だけはみゆきの存在に気がついた。

それは、和彦が『死』にとても近かったから……。

死神であるみゆきと『死』に近い和彦が近づく事で、和彦の死がよりいっそう早まった。

自分の存在が和彦の命を削るとわかっていても……。

「私も……和彦に逢いたかった……だけ……。ただ……それだけだった」

いつも、和彦の傍で和彦だけを見ていた。

和彦の辛さも悲しみも、全部わかっていた。

だけど、自分が『人』に転生するためには、死にゆく命を狩らなければならなかった。

多くの人の命を狩ってきた自分が、和彦を苦しめるだけの自分が、嫌で仕方がなかった。

でも……あの日。

和彦は自分を見つけてくれた。

もう誰も呼ばない自分の名を、和彦は呼んでくれた。

自分を求めてくれた。

それだけで……、みゆきの心は満たされていた。

和彦と逢う時間だけが、とても幸せな時間だった。

それなのに……。

「こんな結末……望んでなかったのに……」

例え『人』になったとしても、その先に和彦がいなければ……意味がないのに……。

和彦がいない時を、生きるなんて今はもう……出来ないのに……。

みゆきは、手の中から死神の鎌を呼び出す。

これしか、方法が無い。

和彦を助けるためには、自分がいなくなればいい。

死の元凶である自分がいなくなれば、きっと和彦は助かる。

和彦から死相が消えて、生きる道へと通じる筈だ。

和彦が自分を覚えていなかったとしても、きっと未来は繋がっている。

それだけで、自分は幸せに思えるから……。

みゆきが鎌を振り上げ、自分へと突き立てようとした時だった。

「え……?」

何か白いものが、みゆきの頬にあたる。

みゆきは咄嗟に雪かと思った。

だが、そうではない。

今日は雲一つの無い、空の天気の日だ。

いつの間にか先程までの寒さは消え、暖かさが伝わってくる。

そして、みゆきが顔を上げれば……。

信じられない光景が、目の前で浮かび上がっていた。

だが、その光景だけが異様に光り輝いている。

そしてそれは、現実。

「ちく……らなの?」

みゆきの口から、素直に零れ落ちる。

桜の花が咲くにはまだ大分早い時期なのに……、桜の花が満開に、そして美しく咲き誇っている。

それはまるで、和彦と出逢ったあの時のように……。

その桜の木から、花びらが二人へと落ちてきていた。

和彦やみゆきを花びらが包んでいく。

それはまるで、二人を守るように……。

「どうして……？」

どうして桜が咲く事が出来たのかは、わからない。

季節外れの桜が……何故今咲いているのか……。

だけど……ただ一つ、わかっている事は……。

「あなたも……和彦に……生きていてほしいんだね……」

和彦から常にこの場所へ訪れている話を、聞いた事がある。

悲しみに満ちていた和彦を桜が慰め、いつしか桜は和彦の心の拠り所になっていた。

そして今、和彦の死を桜も悲しんでいるのだと……、みゆきにはわかった。

「私たちはまた……いつかきつと……巡り逢える……」

それがいつになるかはわからない。

数年後なのか、数十年後なのか……来世なのか……。

それでも……出逢える事を信じている。

どこかで、繋がっていると信じている。

例え消えても……、新しいものが生まれていくものだ……。

それは、和彦とみゆき……、そして桜の願いでもあるのだから……。

「和彦……さよなら……」

みゆきは鎌を大きく振り上げる。

鈍い音が聞こえ、桜の花びらの中へと消えていく。

そして……一つの魂も消えていた。

さくらゆき 22話「穏やかな春」

数年後。

今年もまた、春の季節が巡ってくる。

その暖かい陽気に、人々は穏やかな日々を過ごしていた。

そして、ここにいる人物も例外ではない。

「起きろっ」

パシッとか何かで頭を弾かれる音がした。

「んあ？」

「こんなところで寝てるなよ、和彦」

「おわ、寝てたか？」

「ああ、盛大に寝てた」

大学のベンチで居眠りをしている姿は、とても目立つ。

堂々と眠っている姿に、茂は怒りを通り越して最早呆れた。

「折角大学に合格出来たのに……もうこれか……」

「かたい事言うなよ。長かった勉強期間を終え、ようやく訪れた学園生活なんだぞっつ。少しは満喫させろ」

「全く……お前って奴は……」

「お前はまだ勉強するのかよ……。院生になるなんてさ……」

「そのおかげで、お前に勉強を教えてやれたんだろうが……。次の試験は手を貸さねえぞ」

「すみませんでしたっつ」

茂の言葉に、和彦はすんなり謝る。

まだまだ試験に不安がある自分は、茂に頼らないと駄目なのだ。

そんな和彦に、茂は笑って許してやる事にした。

「体調が良くなったとはいえ、油断するな。この後、検診だろ？」

「ああ……」

茂は和彦自身よりも、和彦が病院に行く日を把握している。

「大丈夫だったの。もうお前といい、俺の親といい……、心配しすぎだよ」

「全くのんきだな。一度は死にかけたっつというのに……」

「まあな……。ほんと、運が良かったよ……」

あの冬の日。

本当に駄目だと思った。

だが、見回りをしていた警備員に、和彦は発見された。

その時の和彦は何故か、季節外れの桜の花びらに包まれていたそう  
だ。

そして、そのまますぐに手術室へと運ばれ、和彦は一命を取りとめ  
た。

茂も両親も泣きながら、喜んでいたという。

その後に、奇跡が起こったのだ。

和彦の身体に合うドナーが見つかり、和彦に新しい心臓が移植され  
る事になった。

手術は無事に成功。

和彦の身体は拒絶反応もなく、順調に回復。

その回復の速さは、周囲を驚かせていた。

それくらいの幸運が、和彦には起きていた。

その後、和彦は高校を中退し、その代わりに大検を受けるための勉強を始めた。

大検の合格後は、大学受験の勉強だ。

ギリギリで合格を果たし、長かった受験勉強からようやく解放された。

和彦には待ちに待った、学園生活が始まっていた。

驚異的に回復はしたものの、両親たちからは過保護になるくらい身体心配をされている。

そのため和彦は月に一度、病院で検診を受ける事になっていた。

「じゃあ、俺行くわ」

「ああ、またな」

和彦は茂に別れを告げると、校門がある方向へと歩き出していた。

さくらゆき 最終話「鮮やかで美しき世界」

「今日も異常なし……と」

診察はあっさりと終わり、和彦の身体は健康であると診断された。

その結果を聞いた後、和彦は自然とあの場所へと足を向ける。

それは、和彦にとっての習慣だった。

和彦が大切にしていた場所、桜の木。

桜の木へと辿り着くと、和彦は上を見上げて桜を見つめる。

「……やっぱり、咲いてないか……」

春のこの季節は、満開に花を咲かせていた筈なのに……。

今では、花を咲かすどころか、木の枝に葉すらつけなくなった。

その状態がすでに数年の時を経たまま、今に至る。

原因はわからないまま、突然その桜は朽ちてしまった。

それは、和彦が死にかけた……あの日を境に……。

気がつけば、ずっと桜と共にいた。

悲しい時も、辛い時も、寂しい時も。

桜の木の傍に行けば、いつも慰めてくれた。

安心させてくれた。

優しくしてくれていた。

自分はずっと、桜の木に守られていた。

無くしてから……、その存在に救われていた事に気がついた。

気づくのはいつも遅くて……、情けなくなるけど……。

それでも、止まっていた自分の時間が……ようやく進める気がした。

「俺……やりたい事見つけたんだ……。俺が生きる意味……。俺は  
医者……人を救える医者になりたいんだ……」

自分が今まで助けられてきたように……、自分も誰かを救いたい。

救えるような存在になりたい。

今はもう咲かない桜だけ……、またいつか咲くかもしれない……。

それまでこの桜は……和彦の中で咲き続けるから……。

「……ありがとう……」

和彦は小さな声で口にしていた。

この場所に来ると対になって思い出す……。

それは、たった一つの存在。

和彦は自然と、桜の木の下で寝転がっていた。

周りの人の目などは関係ない。

今の自分がこうしたかった。

こうしていると、あの日のみゆきが思い描ける事が出来た。

「そうか……。こうして上を見れば……。空は一面の桜だったんだな……」

今はもう木の枝だけだが、きっと以前の空は桜色で染まっていた。

みゆきはきつと、その光景を見たくて……。寝ていたに違いない。

桜が好きだと言っていた少女は、わかっていたのだろう。

桜が美しく見る事の出来る方法を……。

そんな事を今になって、あの少女はまた教えてくれていた。

身体が落ち着いた後……和彦は何度もこの場所に訪れていた。

今のこの場所は、集まる人が少なくなった。

だけど、それでもあの時の桜を思い出し、自分の他にも訪れる人もいる。

桜は、色んな人々を救ってきたのだ。

そして、桜が枯れると同時に、みゆきの姿も無くなった。

行き交う人々に、みゆきの事を聞いても誰もその存在を知らなかった。

あの出逢いは、夢だったのかと思う時もある。

だが……。

この桜の存在が夢ではないと、証明してくれる。

そうあの日、桜の木の下で出逢ったのは、夢ではない。

みゆきと過ごしたあの日々は、夢ではない。

『私たちはまた……いつかきつと……巡り逢える……』

そう、みゆきの声を……、和彦は薄れゆく意識の中で聞いた気がした。

「ああ……。俺もお前とまた……。逢えるのを信じている」

桜の木の下で、桜の花びらに包まれて眠っていた少女。

和彦は、あの時一瞬で心を奪われていた。

そこから全て始まっていたのだと、今ではわかる。

あれがきつと、自分にとって運命の出逢いだったのだと……。

そして、これからまた新しい未来へと繋がっていく。

和彦は、信じて待ち続けようと決めていた。

たった一人の、大切な人を……。

急に強い風が、和彦の身体に伝わってきていた。

「わ……っ」

この時期の風は、強くて困る。

その風に煽られ、一つの帽子が和彦へと飛んできた。

和彦はその帽子を拾い上げると、目の前が急に暗くなった。

この帽子の持ち主かと、和彦は顔を上げる。

「っ……っ……」

思わず目を見開けば、目の前の白いワンピースと長い黒い髪が風で摩く。

それと同時に……、桜の木の枝も揺れている。

そして、穏やかな日差しの中で……ずっと風が優しく吹き続けていた。

今日もまた、世界は鮮やかに、そして美しく廻っている。

和彦は、そう感じていた。

～END～

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8971y/>

---

さくらゆき

2011年12月23日14時53分発行